

結章 デリダと『千夜一夜』

本論文では、第Ⅰ部において、デリダにおける「範例性」の概念をめぐる思想展開とデリダ特有の「文学」の問題意識を抽出し、第Ⅱ部において、特個性が特個性に留まらないようなあり方を文学作品として具現した『千夜一夜』の諸特質を検討した。それぞれのまとめはすでに各部の最後に付したので、ここでは、より積極的にデリダの思想と『千夜一夜』との照応をはかることで、本論文の結章としたい。

「例」をめぐる思考はなぜデリダにとってかくも重要であったのか。たとえば彼は、1993年の著作『マルクスの亡霊たち——負債の状態、喪の作業そして新しいインターナショナル』でも、なぜマルクスを例に採りあげるのかを考えると同時に、「例」そのもののあり方についてこう述べている。

ひとつの例はつねにそれ自身の彼方にまで達する。すなわちそのようにして例は遺言的な次元を開くのだ。例とは、まずもって他のものたちのために〔／に代わって〕あるのであり、自己を超えたものなのだ。¹

デリダの思想は初期の用語を用いて一言で「脱構築d \acute{e} construction」の思想と呼ばれるが、イギリスの現代文学理論家N・ロイルが述べるように、「脱構築」とは、「「ものそれ自体」のうちにすでにある動揺をさらに不安定化させる論理」であり、「すべての自己同一性をそれ自身であると同時にそれ自身とは異なるものにするもの」であるとすれば²、「例」はま

¹ « Un exemple porte toujours au-delà de lui-même : il ouvre ainsi une dimension testamentaire. L'exemple, c'est d'abord pour les autres, et au-delà de soi. », *Spectres de Marx, L'État de la dette, le travail du deuil et la nouvelle Internationale*, Galilée, 1993, p.64.

² Nicholas Royle, *Jacques Derrida*, Routledge, 2003, p.24 (邦訳、ニコラス・ロイル『ジャック・デリダ』田崎英明訳、青土社、2006年、p.53). Royle, "What is Deconstruction", in Royle ed., *Deconstructions : A User's Guide*, Basingstoke & New York : Palgrave, 2000, p.11で提示した定義の引用。

さしく脱構築を代表する一つの形象であるということになる。そしてほとんどまったく同じことをデリダは「文学」について繰り返し言ってきた。たとえば『パッション』の最後の文章を思い起こしたい——「文学はつねに他なるもの、自分自身とは別の他のものであり、他のものを言い、他のものをなす。その自分自身とは、それ、すなわち自分自身とは別の他なるものにほかならない」³。その意味で、デリダにとって「文学」と「例」とは直結する。「文学はとりわけ〈範例的exemplaire〉である」⁴ともデリダは述べていた。

文学が固有なるもの、特個的なもののためにあるのではなく、むしろ何か他のもののために、その代わりにあるのだということ、つまりは文学が代替性の場そのもので（も）あるということがデリダによって明示された。むろん個々の文学作品は代替不可能である。しかし代替不可能性の象徴たる文学作品は、文学であるがゆえに、虚構であるがゆえに、代替可能性そのものを象徴する場となる。こうした理解に立ったとき、『千夜一夜』はまさに典型的な「文学」として浮かび上がる。『千夜一夜』の代替可能性は突出している。既存の物語の借用によって成り立つ点ですでに代替性を刻印されているこの作品は、内容の面でも、シャハリアル王の暴虐にさらされる娘たちの代わりに自分の身を差し出すシャハラザードをはじめとして、誰かの代わりに（誰かの命と引き換えに）物語をおこなう多数の語り手たち⁵、誰かの代わりに代理人として行動する多数の援助者たち、その援助者たちの指図どおりに非＝主体的に行動する主人公たちなど、いたるところで代替性を強調していた。『千夜一夜』内部でのモチーフやストーリーの反復現象は、あらゆる要素に代替可能性を感染させる。また実際に生成史上『千夜一夜』の編纂は、収録話やモチーフの入れ替えをおこないながら続けられてきた。『千夜一夜』という文学作品自体が何か他のものの代わりに存在してきたのであり、そのたえざる変貌は、この作品が何か他のもののために存在していることを証しているのではないだろうか。

完成のやり直しを繰り返してきた『千夜一夜』はまさに「各世代がはじめからやり直さなくてはならない」ような「非＝歴史non-histoire」（すなわち歴史ならざる歴史）のなかに、言いかえれば「一歩ごとに作り直される伝統」⁶のなかに生きていると言えるのだが、そのことはこの作品を署名のないテキスト、少なくとも単一の署名に帰されることのないテキストとなしている。「署名signatures」と「連署contre-signatures」の無限の連鎖の積

³ *Passions*, Galilée, 1993, p.91 (邦訳、『パッション』湯浅博雄訳、未来社、2001年、p.96)。原文は本論文第1章注92を参照。

⁴ *Ibid.*

⁵ 彼らは自分のことについて物語る場合ですら、その極度な虚構性ゆえにほとんど自分について語ってはいないという印象を与える。まさに「自分について語ることなしに自分について語る」(*Passions*, p.91, 邦訳 p.95) ような語り手としてあることも指摘しておきたい。

⁶ Cf. *Donner la mort*, Galilée, 1999, p.113 (邦訳、『死を与える』廣瀬浩司・林好雄訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2004年、p.166)。

み重ねがこの作品を存続させてきた。誰もが署名者で誰もが「配達人」(媒介者)でしかないようなこの動態的テキストは、この作品に触れるあらゆる者を特殊な位置におく。デリダは、書くということはすでに「連署的な読みcountersigning reading」⁷であると述べ、読みとは「^{カウンターサイン}連署」を増殖させていく行為であるとしていたが、まさに『千夜一夜』はそのような作品だ。こうしたデリダ的なテキストにおいては、書き手とそれ以外の読者との違いは絶対的なものではなく、せいぜい程度の差にすぎないことになるということに注意しよう⁸。『千夜一夜』の世界では、書き手(写本家、編纂者、翻訳者)あるいは口演者は読み手であることが条件であり、読み手はすでにして意識のなかで書き手になっている。読み手もまたつねにすでに署名を付け加えてしまっているのだ。だからこのテキストの生成に責任があるのは演じ手や書き手ばかりではなく、読み手もまたその責任のうちにあることになる⁹。『千夜一夜』は、誰もが応答=責任responsabilitéのなかにおかれるような文学空間なのだ。

『千夜一夜』が過剰なまでに「虚構性」を強調した作品であることも見逃せない。「不可思議」であることを最大の価値として展開されるさまざまな物語は、信憑性やもってもらしさとは無縁の世界を展開する。「虚構」の産出(正確には産出ではなく媒介提示であるが)を使命とする物語り手たちは、まさに「何を言ってもよい」権利を有している。物語ることによって責任を逃れる——たとえば(罪なき)罪をのがれて延命する——ことに成功するというプロットにも象徴されるように、この物語り手たちは責任を免除された存在だ。彼らは自分の語った内容に責任をとる必要を免れている。この無=責任性は、主人公たちのいかにも無責任な行動として『千夜一夜』の世界に充溢する。主人公たちはほとんど、場当たりの無反省な行動しかとらない。しかし『千夜一夜』は彼らを、とがめられるべき無責任な主体として描いているのではない。彼らは「責任主体」の別のあり方として提示されているように思われる。デリダが得意の逆説を用いて問題提起するように、たとえば道德によって(つまりは義務や責任の感覚をもって)行動するとすればそれは「道德的」なおこないではない¹⁰。『千夜一夜』の主人公たちは、状況に身を任せみずからは道德や責任の感覚をもたずに行動することによって、ある種の道德を体現し、責任主体となる。それは『千夜一夜』の主人公たちが、明確な悪意や、責任を回避しようとする姿勢と無縁であることにも表わされているのではないか。彼らはけっして「自立」することなく、たえ

⁷ “This strange institution called literature; an interview with Jacques Derrida”, in Derek Attridge ed., Jacques Derrida, *Acts of Literature*, Routledge, 1992, p.69.

⁸ Cf. 斎藤慶典『なぜ「脱-構築」は正義なのか』、NHK出版、2006年、p.47.

⁹ 高橋哲哉の解説を参照——「テキストが他者の署名を呼び求めるといふ本質的に開かれた構造をもっているからこそ、読者は責任のうちにおかれる」(高橋哲哉『デリダ——脱構築』、講談社、1988年、p.167)。

¹⁰ *Passions*, p.39 (邦訳 p.35).

ず周りの人物たちとの応答のなかで生きていることも忘れてはならない。『千夜一夜』の人物たちは、デリダ的な意味で「無＝責任irresponsable」な「責任＝応答主体sujet responsable」だと言えるだろう。

『千夜一夜』の主人公像のうちに読みとることのできる人間観についてもう少し述べておきたい。すでに第Ⅱ部でみたように「非＝知」の姿勢と「受動性」に深く浸されている『千夜一夜』の登場人物たちは、まさにデリダの「到来するもの」の思想ないしは「歓待」の思想を体現しているように思われる。彼らはなんの準備もなく、まさに準備しないということの準備だけがすっかりできあがっているような無防備な状態で、出来事の連鎖に身をさらす¹¹。『千夜一夜』の登場人物たちは、デリダの述べる（不可能なはずの）純粋な無条件の「歓待」の姿勢にあるように思われる。彼らはあらゆる出来事との遭遇をなんの準備もない状態で生き、自分がなんの決定権ももたず、何も知らず何もわからないときに（決断ならざる）決断をおこないながら生きていく¹²。計算をなすことなく、決定を下す人格としての自己同一性をもたないままに（すなわち「現前présence」とは異なる在り方のうちに）、能動的ではないしかたで決定を生きるような受動的能動者として『千夜一夜』の人物たちはいる。他者に頼り、他なるものに絶対的に身をさらす彼らは、まさに他律性と自律性の同立状態を生きる他律＝自律的hétéro-autonomiqueな主体と言えるだろう。

『千夜一夜』が典型的にオラル（口頭性）とエクリ（書記性）の往復を示す場であることも確認しておきたい。これもデリダにとって根源的な重要性をもつ現象であった。デリダ自身が、数々の講演をもとにしたテキストを書物として発表することで、オラル＝コミュニケーションの痕跡を書かれたヴァージョンにもち込むことをたえず意識的に実践していたことに注意したい¹³。たとえば『シボレート』の刊行にあたって、デリダは印刷テキストに口語性を残す最大限の努力をおこなったとわざわざことわっているし、『マルクスの

¹¹ Cf. 「私は準備なしでいなければならない、あるいは準備なしでいる準備ができていくてはならない。ありとあらゆる他者の予期されぬ到来にたいして。」 “I must be unprepared, or prepared to be unprepared, for the unexpected arrival of *any* other.”, “Hospitality, Justice and Responsibility, A dialogue with Jacques Derrida”, in Richard Kearney and Mark Dooley ed., *Questioning Ethics, Contemporary debates in philosophy*, Routledge, 1999, p.70 (邦訳、「歓待、正義、責任——ジャック・デリダとの対話」安川慶治訳、『批評空間』Ⅱ-23、1999年、pp.107).

¹² Cf. *Donner la mort*, p.126 (邦訳 p.187).

¹³ M・ナースはデリダのこうした著作発表のしかたには、「臨場感 occasionality」、つまり彼の思考が提示された現場のシチュエーションをテキストに投影する効果があることを指摘している (Michael Naas, “Introduction : for example”, in Derrida, *The Other Heading*, Indiana University Press, 1992, repris dans Zeynep Direk & Leonard Lawlor eds., *Jacques Derrida: Critical Assessments of Leading Philosophers*, Routledge, voll. II, 2002, pp.333-334)。本論文では、こうした臨場感よりも、口頭言語にあらわにされる言語そのものの“偶因性 occasionality”が文字テキストに導入されることを重視したい。

亡霊たち』でも同様の記述を読むことができる¹⁴。また“シドニー・セミナー”では、視覚芸術においては（ここでは文字テキストを考えたい）、最も視覚的で最も無言の側面に、音声性や、さらには口頭性を刻み込む可能性が、あるいは口頭言語の可能性を書き込む可能性がある」と述べられている¹⁵。デリダが実は、口頭言語の奥深い可能性と書記言語との接合をエクリチュールにみようとしていたことは、『ユリシーズ・グラモフォン』で提起された「グラモフォニー *gramophonie*」という概念にも明らかであろう。「グラモフォニー」とは、まさに書くことと音声言語との交叉を主題化した用語にほかならない。「耳と目のあいだ」の往復運動、つまりパロールとエクリチュールのあいだのたえざる行き来を捉えること¹⁶がデリダの一つの課題であったわけが、さきにみたように読者が書き手になり、読み手と書き手に切断がない『千夜一夜』は、その格好の事例として私たちの前にある。書くこととしゃべること、読むことと聞くことのあいだに緊密な連繫を成立させる『千夜一夜』は、「物語」というものが本来、オラルとエクリという言語の二つの側面の重ね合わせを実現する場であることを明確に示している。書かれた語りとしての「物語」とは、まさに語られたように書くこと、書くことと語ることを重ね合わせるところに成立するものであることを、物語文学研究は今後も考えぬいていかなければならないだろう¹⁷。

『千夜一夜』は不可思議なテキストである。私たちは、『千夜一夜』の世界に触れることによって、誰かの声を聴きながら無数の声を聴いているような、かつまた、誰の声も聴いていないような不思議な言語体験を味わう。また、私たちの前に展開される世界が、そこにあって、まったくない、という逆説的な存在感覚を強烈に味わう。『千夜一夜』はデリダがその思想活動の初期から、言語を通じて問題化しようと熱心に努めてきたような、「遺言的な」存在のあり方を端的に示す装置である。デリダは「遺言的*testamentaire*」という概念をめぐって、「私が生きていようといまいとにかかわらず«*je suis*»は意義する」という問題に触れていた。「«*je*»が誰かある知らない人間によって書かれたかのような状況」を出現させるのが言語とりわけエクリチュールというものであり、「その「本人」が知られていない場合だけでなく、その人間が全く架空のものである場合にも、そして彼が

¹⁴ Cf. *Schibboleth : pour Paul Celan*, Galilée, 1986, p.9 (邦訳書ではこの部分は訳出されていない); *Spectres de Marx*, p.10.

¹⁵ Cf. ポール・パットン&テリー・スミス編『デリダ、脱構築を語る——シドニー・セミナーの記録』谷徹・亀井大輔訳、岩波書店、2005年、p.19。

¹⁶ *Ulysse Gramophone, Deux mots pour Joyce*, Galilée, 1987, p.47 (邦訳、『ユリシーズ グラモフォン——ジョイスに寄せるふたこと』合田正人・中真生訳、法政大学出版局、2001年)

¹⁷ たとえば『源氏物語』の「草子地」の問題を参照。高橋亨はつとに、口頭性と書記性の重層化のなかに「かな物語」文学の本質をみている。高橋亨『源氏物語の詩学——かな物語の生成と心的遠近法』、名古屋大学出版会、2007年を参照。

死んでしまっている場合でも、われわれが「je」という語を理解する」という事態の不思議に触れることがテキスト体験だとすれば¹⁸、『千夜一夜』は典型的にデリダ的なテキストだということができる。

文学のエコノミーとは、「可能な最小のスペースのなかに、最大の可能性を出現させること」であるとデリダは述べていたが¹⁹、長大な時空を多重的に蓄積し無数の人間の文化的な営みを集積してきた『千夜一夜』のめまいのするような薄くて厚いテキストは、最小限の特個的な出来事性のなかに、歴史的・理論的・言語的・哲学的・文化的な最大限の潜在的 가능성을包蔵する文学の「^{エコノミック}経済的なパワー」の例証そのものであると捉えることができる。

特定の誰かとほかの誰かや誰でもない誰かを、特定の何かとほかの何かや何とも知れぬ何かを、不可思議なしかたで結び合わせる「範例性」の装置『千夜一夜』は、多様な側面においてデリダの思想と呼応し、私たちにこれからの文学の思考を促してやまない。

¹⁸ *La Voix et le phénomène*, Presses Universitaires de France, 1967, pp.106-108 (邦訳、『声と現象』高橋允昭訳、理想社、1970年、pp.180-182).

¹⁹ Cf. "This strange institution", pp.46-47.